

# 分析化学（会）愛好家のすすめ



手 嶋 紀 雄

Scopus（引用文献データベース）で自身の著者解析をしてみた。ジャーナル別の文献数が、円グラフで表示される。本会の重要な学術雑誌である「分析化学」、「Analytical Sciences」の両誌に掲載された筆者の論文数の割合は、筆者の原著論文の全体数に対して、実に約43%であった。この割合を勝手に“分析化学（会）愛”の指数と定義すれば、我ながら高い割合をもっていると感じる。

支部長職を仰せつかると、本会の会員数を目にするのがあり、バブル期を知る者にとっては、暗澹たる<sup>あんたん</sup>思いがよぎる。しかし、楽観主義者の筆者が落ち込むのは数秒間だけだ。分析化学（会）愛好家の一人として、できることを考えてみた。

年会での発表を機に本会会員になる学生は多い。卒業生に「会員を続けている？」と尋ねたところ、分析に携わる度合いが高い元学生は続け、関係性が低いあるいはほぼ無い元学生は、卒業と同時に退会する傾向にあった。当たり前の結果ではあるが、つまりは分析に携わる進路への指導をもっと頑張らなければならないことが分かる。

ぐっと若い世代への教育も重要と考える。筆者の所属大学が企画する「少年少女科学・ものづくり教室」において受講者の小学生達に（非公式の）ぶんせき博士認定証を授与したことがある。文面はこうだ。『あなたは愛知工業大学本山キャンパス公開講座「水のぶんせき博士になろう」を受講しました。よってここにぶんせき博士の称号を授与します。将来本学に進学されさらに勉学に励むことを期待しております』。中部支部には諸先輩方のご尽力により「若手育成・中高生教育基金」が存在する。こういった基金も有効活用し、将来の分析化学（会）愛好家を育てる活動にも尽力していきたい。

一方、研究活動によって会員を維持し増やすにはどうしたらよいか。本誌「とびら」で何度も訴えられてきたことであるが、本会が提供する「ぶんせき」、「分析化学」、「Analytical Sciences」の各誌とにかく魅力ある記事、研究論文を載せ続けることだ。中3の娘は放っておいてもファッション雑誌をお小遣いを使って買ってくる。興味があり、必要とするからだ。学術性を重んじるべきで、奇をてらう必要はないが、そのような記事、論文をこれからもこの三誌に投稿し続けようと思う。

本拙稿の執筆時に、留学先の先生だった Purnendu K. Dasgupta 教授（テキサス大学アーリントン校）がアメリカ化学会 2015 年 J. Calvin Giddings Award for Excellence in Education を受賞した朗報に接した。第一線で活躍されている研究者であることは言うまでもないが、教育分野でも最高の栄誉を手にした。筆者が少しでも近づきたい存在のお一人であり、彼の存在自体が分析化学愛好家を増やしていると思う。

ここで論じた会員増加・維持の対策は、あまり具体的ではなくどちらかと言えば、精神論であることは自認している。具体策の提案はもっとスマートな方々に任せたい。実体のある対策に精神論が加われば、それに越したことはない。筆者はそれを実践しよう。

〔Norio TESHIMA, 愛知工業大学工学部応用化学科, 日本分析化学会中部支部長〕